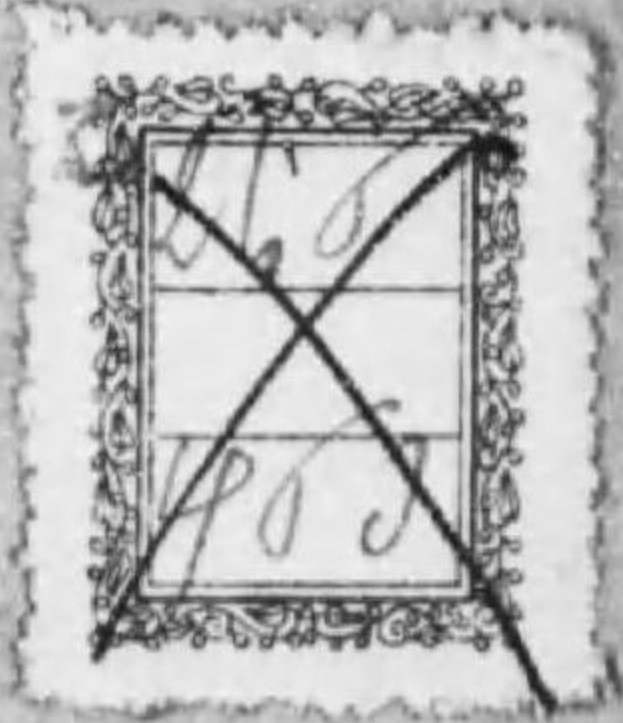


特 113

889



9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10<sup>19</sup> 1 2 3 4 5

始



43113  
889



ツレ	ワキ	後シテ	同上	ツレ	前シテ	役別
從僧二人	旅僧	源朝長の靈	供男	侍女	長青墓の宿の者	
右同断	着流僧	〔面〕十六又中將にても 着附厚板 白大口 單法被(長絹にても) 腰帶 太刀 扇	紫袍男 太刀 大扇	〔面〕小面 襷 裳 同帶 着附箔 唐織着流し	〔面〕曲見又は深井 襷 裳 同帶 着附箔 唐織着流し 珠 敷 木の葉	装束
目	番	二	類別	宿の墓青國	美正	所
	月			正	5	4

朝長

内之部卷之六ノ二

朝長一

大正 5 年 4 月 内交

解説

ワキ、同ツレ二人、名宣笛にて出で、舞臺に入り諺ふ。  
ウキ名宣 『是は嵯峨清源寺より出たる僧にて候』 此處は納めて諺ふべし。道行、着キ濟み、狂言と

セリフありて三人とも脇座に行き下に居る。

次第にて、シテ、女ツレ、男ツレと出で、舞臺に入り向き合ひ諺ふ。

ニテ表 『花の跡とふ松風や』 此處はしつとり諺ふべし。

シテ表 『是はあふはかの長者にて候』 此處は改めて諺ふべし。下歌、上歌それづくに諺ひ、上歌の

止メにてシテ、正面へ行き、木の葉下に置き、合掌、ツレ二人は後見座へクツログ。夫よりシテは常座に歸り、ワキへ向き、

シテ表 『ふしぎやな此御墓所へ我ならては』 と、諺ふ。以下の懸合宜しくありて。

初五表 『死の縁の所もあひにあふ墓の』 初同はしつとりつけて諺ふ。此一段諺ひ方心得あり、習ひ、口傳。

ワキ、口傳。

ワキ表 『いかに申候、朝長の御最後の有様委く語つて御聞かせ候へ』 此處にてシテ、中へ

行き、下に居。

シテ表 『其時の有様申すにつけて痛はしや』 と、諺ひ出す。是より以下語り、心持、緩急種々ありて大事なる所なり。口傳。

地八表 『是を最後のおことばにて……』 此處は軽く、而も大事につけて諺ふ。

地九表 『悲しきかなや』 此處は氣を變へて諺ふ。

地九表 『雲絶々に行空の』 此處にてシテ立ち、右へ廻り、『あふ墓の宿に着にけりく』と大小の前に着く。

シテ表 『いかに僧達見苦し候へ共』 と、ワキへかゝり諺ふ。此の懸合濟み、『いかに誰

かある』 と、ツレを呼び出す。男ツレ立ち、脇正面へ出で、シテへ向き下に居、禮して『御前に候』 と、諺ふ。

前候』 と、諺ふ。

此懸合濟みて、シテ、中入、女ツレもシテの後につき退く。男ツレ大小の前へ行き、シテの通り狂言呼び出し、セリフあり、右濟みて男ツレも幕に入る。

夫よりワキと狂言と懸合ありて、

ワキ符表 『偕も幽霊朝長の』 と、ハツキリ諺ふ。

同止表 『浮ぶ計りのけしきかなく』 此處にて出羽打ち出す。

後シテ、出羽にて出で、舞臺に入り諺ふ。

後十一表 『あら有難の懺法やな』 此處ハツキリ諺ふべし。

地十一表 『心耳をすませる……』 此處は少しかゝりめにつけて諺ふ。

地十二表 『ふしぎやな観音懺法聲濟みて』 ワキもかゝりて諺ふ。以下懸合宜しくありて、

地十三表 『あれはとも言は、形や消えなまし』 此處も同じくかゝりめにつけて諺ふ。

十三位 地

『夫朝に紅顔あつて』

クリ地にてシテ、中へ行き床几。

朝長四

此以下、ロンギよりキリにかけてシテに種々の形あり、すべて篤き見計ひ諱ふべきなり。

朝長

<sup>三</sup>
  
 田六郎城清涼寺よりあはは僧  
 むしてあはは家来治のち  
 義朝都を流るるのち  
 大なる朝長にの國あはは  
 け家へ自宮一果のち

朝

由、故、我、の、須、長、は、は、ら、の、行、自、の、

了、の、行、自、の、須、長、は、は、ら、の、行、自、の、

申、の、行、自、の、須、長、は、は、ら、の、行、自、の、

漸、回、乃、長、橋、く、ら、後、く、ら、後、く、

行、ま、る、鏡、山、若、曾、乃、柱、を、お、も、

て、ま、る、伊、吹、の、山、風、乃、不、破、也、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、

一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、一、



Handwritten text in a cursive script, likely a letter or a page from a manuscript. The text is written in a fluid, connected style with some decorative flourishes. It appears to be a personal or official communication.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. It contains several lines of text, possibly a continuation of the same document or a separate entry. The script is consistent and legible.

Handwritten text in a cursive script, likely a historical document or manuscript. The text is written in a fluid, connected style with some decorative flourishes. It appears to be a single paragraph or a list of items.

Handwritten text in a cursive script, similar to the one on the opposite page. It features a mix of straight and curved lines, with some characters appearing to be stylized or abbreviated. The text is arranged in a single column.



朝妻の  
 影の縁の相のなるを  
 跡乃きか草の後のまの  
 名をして古のまのまの  
 あつら秋の清き影乃焼るれ  
 影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの

影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの  
 影のまの影のまの影のまの

皆て此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
果してたゞ人の心に入らざれば、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、

此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、  
此の如くしてありては、







一、<sup>レ</sup> 衆生は悉く佛の道に迷ひて、<sup>レ</sup> 生死の輪を転ずる者なり。

佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。

一、<sup>レ</sup> 衆生は悉く佛の道に迷ひて、<sup>レ</sup> 生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。  
佛の道に迷ひて生死の輪を転ずる者なり。











夢...  
父...  
思...  
男...  
申...  
後...  
は...  
あ...

思...  
乃...  
身...  
乃...  
杯...  
杯...  
杯...

行の... 敬の... 有様の... 係... 極... 極... 極... 極... 極...

馬名頻... 極... 極... 極... 極... 極... 極... 極... 極...



所有權在者

大正五年四月

四日印刷  
九日發行

東京市深川区西平野町一番地

著者 寶生九郎

東京市日本橋區通四丁目八番地

發行者 江島伊兵衛

東京市日本橋區通四丁目八番地

發行所 椀屋謡曲書肆

東京市神田區皆川町二番地

印刷者 田村茂太郎

Handwritten text in cursive style, likely a preface or introduction, written vertically from right to left. The text is partially obscured by a vertical line on the right side of the page.

終

